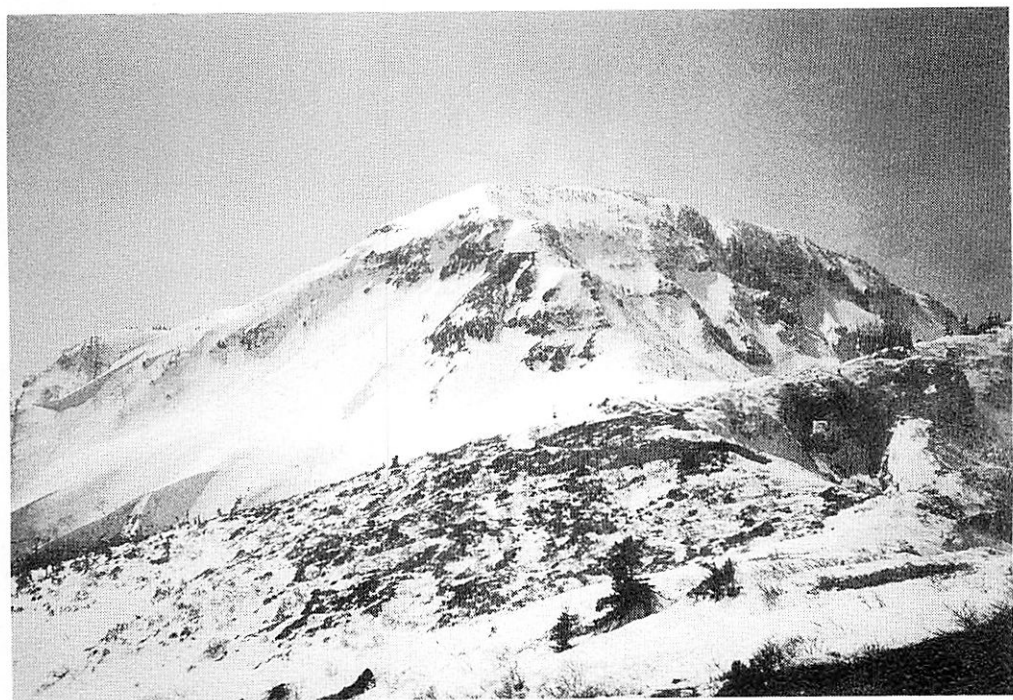


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 29号

1998年4月~6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 98' 春 No29



雨飾山山頂にて 《photo by, Nakajima》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャポン・茨城

パソコン通信

私は最近になってパソコン通信を始めた。始めるきっかけとなったのは、仕事で使っているパソコンがWindows 95が搭載されている新機種に替わったからである。わが家のパソコンは既に電話線と繋いであるので、パソコン通信なんてプロバイダーに入れば直ぐに出来るものと考えていた。もともと私は、アマチュア無線をやっていたくらいだから、機械いじりが好きだったので安易に思っていたが、通信が出来るようになるまでの機械の設定に思いのほか苦労した。千葉の阿部君と電話で話ながら「あーじゃない、こーじゃない」と夜中までやることも度々あった。私がパソコン通信をやる目的は、山に関する情報を得たいためだけであり、それならプロバイダーはニフティが良いだろうという阿部君の薦めもあってニフティを選んだ。

ニフティにはフォーラムという電子会議室がたくさんあり、私は山に関する4つのフォーラムに登録している。使用している通信ソフトによって違うのかも知れないが、フォーラムの情報は題名だけが自動的に受信され、その題名を見て本文を読みたいと思った時だけ本文をダウンすれば良いように設定してある。もちろん自分でも発言や発表は自由にできまわらない。

次に登録したのがメーリングリストである。初め、これがどんなものか良くわからず、高桑氏にチンプンカンプンな質問をしていたのだが、高桑氏の適切なアドバイスによってやっと理解できた経緯がある。メーリングリストとは、趣味を同じくする者が、1つのメールアドレスを使って、情報交換や記録の発表などをする、前出のニフティのフォーラムと似たものである。フォーラムと違う点は、読みたい文でもすべて自動的に配信される事だ。私は現在、Alpine Climbing Mailing List, Climbers Mailing List, sawa&yamaski Mailing List, の3つのメーリングリストに登録している。最近になって分かってきたことだが、どうやらアルパインMLは山行記録や山岳情報、クライマーズMLは技術や道具、サワMLは当然の事だが沢と山スキーに関するすべて、というふうに別れているようだ。

どのメーリングリストも全国に数百人という登録者を有しているのだから、その情報も全国からリアルタイムに近い状態で入ってくる。先般の上高地周辺の群発地震でも、滝谷のグレボンが崩壊したという情報は早いうちから知ることができた。また道具1つについてでも、全国には研究熱心な岳人が多くおられるようである。8mmクライミングザイルは製造されていないと思っていたのに、ヨーロッパでは既にアイス専用として8.1mmクライミングザイルが売られていることがわかったし、以前、縫道石山の資料を送ってもら

ったこともあった。どちらかという、私のような昔のクライマーが発言することは少ないが、なにか私に役に立つことでもできればと、常に全てのメールには目を適している。

それらと平行して始めたのがインターネット。私がやることといったら、山に出かける前に現地の天気の確認と今後の予報、それと交通情報くらいだ。最新の情報が簡単に入手でき、これも今の私にはなくてはならない存在になってきた。しかし、山の天気は行ってみなければわからないという、私の基本的な考えは変わっていないので、よほど予報が悪くない限りは行くことが多いのだが。

世の中どこまで便利になるのであろうか。私はあまりにも便利なものを善とはしない。人工衛星を使った携帯電話も、値段は高いものの以前と比べると随分と小さくなってきたようだ。谷の中から自宅に電話できる時代でも、私は自宅に電話しながら遡行したいとは思わない。溪の中では遊びに徹したいのである。でも、わが家のように年寄りを抱える家庭にとって、一家の主人が何日も連絡の取れない場所にいることは難しい。今の所わが家の年寄りも、今日明日といった状態ではないが、そう遠くない時期に「そのようになると考えなくてはなるまい。どうせ私は山に行かないではいられないのだから、その時は人工衛星携帯電話を真剣に考えるかも知れない。

さて、ここ数年にわたり私が巻頭言を書いてきた。少しでも充実した会報にしようと努力してきたつもりではあるが、実態は友好団体の会報を真似るのがやっと、原稿は集まらず催促すると5行か10行の作文でごまかされる。このような状態で出来上がったお粗末な会報でも、友好団体や友人、OBの皆様は一所懸命読んでくれています。特に石川の青島靖氏には真剣なご助言を数度戴き、それには程遠いものではありませんが、少しずつ改善しつつあります。ここに厚く御礼申し上げます。次号より巻頭言を私から木村一さんにバトンタッチいたします。木村さんは会員皆が御存知の通り、会きっての文才の持ち主であります。これからの巻頭言と充実した会報が楽しみであります。私は編集委員を辞めるわけではないので、これからも校正等編集には微力を尽くしたい所存でありますので、皆様のご協力よろしくお願い申し上げます。

(本図一統)

《目次》

1998年 春 号 4～6月 ACC-J 茨城

パソコン通信	・・・ 1
集会報告	・・・ 3
山行報告	・・・ 4
雨飾山スキー	・・・ 5
丹沢・早戸川・原小屋沢	・・・ 6
鳥海山スキー	・・・ 8
赤谷尾根	・・・ 9
赤岩沢&雁ガ腹摺山	・・・ 11
はじめちゃんの思い出日記	・・・ 12
救助訓練	・・・ 13
逆・深夜鈍行（中編）	・・・ 15
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・ 26
編集後記	・・・ 28

表紙絵… 春の苗場山

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 4 月 】-----

4 月 1 日

出席者 本図、菊地、遠藤、坂本(畠)、木村、笹平、鯉河

4 月 15 日

出席者 本図、坂本(畠)、古山、木村、菊地、笹平

-----【 5 月 】-----

5 月 6 日

出席者 木村、鯉河、古山、高木、中島、鯉河、笹平

5 月 20 日

出席者 本図、古山、菊地、木村、笹平、

-----【 3 月 】-----

6 月 3 日

出席者 本図、菊地、木村、古山、坂本(畠)、生井

6 月 16 日

出席者 古山、木村、鯉河、菊地、笹平

山行報告

《 1998年 4月～6月 》

---【 1月 】---

4月 6日	雨飾山山スキー	L本図、木村、坂本(意)、中島、松原、名雪、金沢
4月12日	丹沢・早戸川・原小屋沢	L本図、坂本(意)

---【 5月 】---

5月3～4日	鳥海山山スキー	L木村、中島、菊地
5月2～5日	赤谷尾根	L本図、坂本(意)、古山
5月 10日	赤岩沢&雁が腹摺山	L本図、坂本(意)、高木

---【 6月 】---

6月 7日	御岩山岩トレ	L本図、坂本(意)
6月21日	救助訓練・古賀志山	L古山、木村、菊地、笹平、高木、坂本(意)、吉田、生井

雨飾山スキー山行

1998. 4. 6

パーティ L 本図一統、中島淳、坂本恵美子、名雪博二、松原文夫、金沢清、吉田信一、木村一

「アマ・カザリ・ヤマ」、響きの良い名前の山がいつの頃からか気に掛かる山の一つになっていました。頸城山群の中にあり麓からは鷲の翼の様な姿が望まれ、岩壁登攀に夢中になっていた頃、雨飾山の「布団菱」に興味を持ったが一度も訪れる機会には恵まれませんでした。

先週、苗場山へのスキー登山の帰路、雨飾山へのスキー山行が急にまとまり、今回の山行になりました。茨城からは本図、木村、中島、坂本嬢の4名、東京からは名雪、松原の百名山コンビ、金沢、吉田の4名計8名の大会パーティになってしまったが、今回も賑やかな山行に終始する予感がある。夜半過ぎに小谷温泉に着くと、宴の跡で東京パーティのテントが特定する事が出来た。

翌朝、6:00出発。アブローチの林道は雪が締まっていたのでスキーを引っ張りながらのいつものスタイルで登高開始。林道をしばらく進むと雨飾山の勇姿が目に見え込んで来た。これから登る予定の南尾根上部、P2から続く頂上岩壁が賊しく輝いている。鎌池の手前に立派な小屋があり、そこから林道を離れてワセ沢に入り、南尾根に続く小尾根に取り付きしばらくの急登後南尾根P4に飛び出した。振り返ると後立山北部の山連み、戸隠、黒姫が一望に出来、正面には大汝山

の雪の斜面が広がり、次に登りたい山、次に滑りたい山が心の奥底から湧き出てくるのを感じる。P2の白いドームまでは雪の急斜面が続き、これをを端ぎながら登るとP2の頂きに出る。P2から見る雨飾山に続く頂上岩壁は迫力のある岩壁だ。しかし岩が脆く落石が出そうな感じがしてヘルメットを車に置いてきた事を後悔した。P2で登攀具を着け本図がトップで登攀開始。約2ピッチの登攀で頂上に続く雪稜に飛び出し、更に雪の急斜面を雨飾山頂上へと向かったが、頂上の一手手前で「ビシ!!」と音がして雪面に亀裂が走り肝を冷やした。

雨飾山頂上は我々だけの世界だった。ここからの眺望は360度のパノラマで、北には日本海、東には頸城山群、西には後立山が望まれ絶景の一語に尽きる。P2にはスキーで登ってきた数パーティが休憩しながら雨飾山頂上を眺めているが、我々の後から頂上岩壁を登攀するパーティは皆無である。

小休止後、2ピッチの懸垂下降でスキーのデポ地点に降り立ち、ここでスキーを着け直滑降と行きたいが今日の雪質は最悪である。2~3日前に新雪が降り、重雪でスキーが回転しない。しかし、P2からの斜面は樹間が広くスキーには最適な斜面である。苦労しながら尾根末端部を横断して奥ワセ沢に入り、途中1ヶ



雨飾山に向かう

所スキーを外して下降したが無事に奥ワセ沢出合の平坦部に到着。ここから林道分岐点まで少し登り往路の林道を滑走して、小谷温泉に15:30到着。小谷温泉で汗を流し一路茨城へ。。。。。。。

車(6:23) - P3(8:27~8:46) - P2(10:15~10:24)
- 岩稜取り付き(10:41) - 頂上(12:04~12:30) -
車(15:47)

(木村 記)



南尾根の登攀

丹沢早戸川原小屋沢

1998. 4. 12

パーティ L 本図一統、坂本恵美子

早戸川は何年ぶりだろうか。川上が遠方への就職のため退会することになり、5パーティで早戸川集中をしたお別れ山行以来である。川上は群馬の渋川に就職し、沼田山岳会に入って活躍していたようであるが、現在は岡山に転勤し、山には行っているのかどうかはわからない。

早戸川と言えば頭の中に最初に浮かんでくるのはヒルである。意外と知られていないが少しどころか沢山いるのである。丹沢でヒルがいるのは早戸川流域だけなのではないだろうか。他の流域でヒルの被害にあったことはないのだが。私はヒルは苦手だ。好きな人はいないと思うが、キジを撃ちたくても山の中に入る気になれない。

眠い目を擦りながら伝道への林道に行く。周りの木々は新緑が素晴らしい。しかし高みの尾根は真っ白で、まるで冬山の様相だ。丹沢の今冬の雪の多さを物語っている。伝道から遡行を開始。残置ボルトなどもありボルダーを楽しんだ後、途中から左岸の道を使って出

平に着く。雷平には2人の釣師がいて、我々が原小屋沢に入るのを見てか、本谷沢の方に入ってしまった。小休して足元を点検するも、ヒルの被害はないようだ。

沢が左に曲がった所で突然F2雷滝に出くわす。水量もまあまあ、想像していたより立派な滝で、下にいると飛沫で寒い。右壁が登れそうに見えたが、この時期のこの水温ではその気になれない。右岸を巻く。バケモノ滝を過ぎるとやがてF5だ。案内書には3段20m、左岸を巻いて懸垂15mとある。しかしどう見ても右岸の方が楽そうに見える。右岸のスラブのスタンスを拾って行くと案の定懸垂なしで行けた。F7ガータゴヤの滝30mは左側のルンゼを登るとある。でもここを巻いてしまっただけではザイルを持ってきた意味がなくなる。ザイルをつけて直登することにした。右壁に取り付くと残置ハーケンもあり、2歩のⅢ+以外は容易であった。坂本はザイルがビーンと張るなど、ちょっと苦労しているように見えたが間もなく登ってきた。すると、着くやいなやザイルを解こうとしている。

これには大声で厳しく注意した。今まで山行でもこのような場面が何回もあり、その度注意してきたが、癖といったほうが良いのか？なかなか直らず、私も少々頭にきていたのだと思うが、キツイ言葉になってしまったかも知れない。

この辺りの残雪は1mもあり、クサリのある滝のクサリは、一部が出ているだけであとは雪の下のため使うことはできない。ブロックの崩壊に気を使いながら恐る恐る雪の下をトラバースする。丹沢でブロック崩壊に気をつけながら登ったのは初めてである。その上は一面の雪で、これが丹沢か？と一瞬疑いたくもなる積雪である。深いところでは2mもあった。

原小屋平に出ると2人のハイカーがいた。雪の上を歩き回っていたので、何をしていたのかと思ったら水を探していたのだ。2人は私達のずぶ濡れの姿を、奇異の目でしみじみと見つめるのだった。私が地元の低山は別として、登山らしい登山をしたのは丹沢が初めてである。18歳の春だったが、その時来たのが丹沢主脈縦走でここを通っている。当時はここにブルーのトタン屋根？で2階建の原小屋山荘があった。疲れて一休みしたのを覚えている。登りたい山がたくさんあって、ここで友人達と次の山行計画を話し合ってたっけ。その友人達は私よりずっとずっと山に燃えていたのに、とうの昔に山を卒業してしまった。万年落第の私だけが未だに卒業できないでいる。できればあの頃に戻りたいものだ。

靴を履き替えながら蛭ヶ岳まで行くことに話が決まった。蛭ヶ岳までの道は雪解のためグジャグジャで不快この上ない。坂本は歩くのが速く、あっという間に見えなくなってしまった。フーフー言いながらやっと着いた山頂は、登山シーズンにはちと早いせいかととても静かで、女性ハイカーが一人寂しく食事をしていた。雲の切れ目から中川川方面が見えた。我々も昼食とする。帰りも坂本に遅れて一人トボトボと歩く。実は今日持ってきた運動靴が足に合わなくてマメができてしまったのだ。そのマメが潰れて皮が剥け、痛くて速く歩けないのだ。姫次を過ぎ、大平分岐から県立青少年キャンプ場に着いた。あと3ヶ月もすれば少年少女で賑わうだろうここは、閑散としてまるで廃墟のような雰囲気を出していた。後は暫しの急降後、本流を徒渉し林道を少々でこの痛みから解放されるだろう。頑張らなくては。



原小屋沢・雷滝にて

本間橋(6:31)ー雷平(7:28~7:36)ー原小屋平(10:32~10:50)ー蛭ヶ岳(11:56~12:10)ー姫次(13:15)ー大平への分岐点(14:03)ー本間橋(15:31)

(本図 記)

ゴールデンウィークの山（鳥海山）

1998. 5. 3～4

パーティ L 木村一、中島淳、菊地光夫

去年のゴールデンウィークは、平ヶ岳へ山スキーに行った木村氏、中島氏の両氏の今年の計画は3日間の休みの中で三つの山を登り、1日で2本～3本のルートを出山で楽しむとの計画であった。今年は、私もお邪魔することにした。

場所は、1日目は岩木山、2日目は八甲田山、3日目は八幡平した。が、行く前に、雪の状態はどうか？現地の情報をインターネットで問い合わせると、今年は特に雪が少なくスキー場はすでに営業を終え、土の部分露出しているとの事で、スキーで滑ってきても下部の方がかなり歩かないと車道は出られないとの事で、急きょ予定を変更して、東北で第二の標高を持つ鳥海山にした。

高速道路はマッハ0、1で飛ばしていく。天気は茨城より雨がザーザーと降っており、運転はし難くガスがかかっていたが、山形道のジャンクション付近より雨が上がってきた。運転は眠いので3人で平等に交替する。3人目は以前にも行ったことのある中島氏がハンドルを握るが、歳を取ったせいか？蔵川の入り口がわからず、愚痴、愚痴、やっていたがどうにかこうにか蔵川の駐車場に車を止める。AM3:00頃に到着。連れションをしてから、車で軽く飲み、2時間後に

は元気に起きて7時には出発した。天気は曇りであったが関東まで来ていた低気圧が近づいているのか？まだだれ一人山頂を目指すものはいなかったが我々が登り始めると、他の連中も姿を見て後より登ってくる。我々はスキー兼用靴で登るが、後より急ピッチで登ってくる2人組はスキー板を履いて角度を固定して勢いよく登ってくる。我々もいいピッチで登って行くが何ぶん強風で（瞬間最大風速は30m位はあったと思う）常に20m位の風の為に、スキー板をザックに固定しての登山なので風にあおられ、四つん這いになりながらの登山であった。しかし樹林帯や急斜面はなく登りやすさはあったと思う。

我々を追い越していった2人組は強風の為鳥海山の首の付近で登るのを止めて、テレマークスキーで一番最初に下っていった。我々はそれより上部までと思い山頂を目指す。先行して行った木村・中島氏が頂上よりスキーで下ってきたので、頂上直下の所から3人で鳥海山の太斜面を思いぞんぶんに滑って下った。雪質もまずまずで春スキーではベストコンディションのように思われた。でも膝にかかる負担は冬の雪とは比べようにならないくらい過大である。途中休憩を入れコースの確認をして、思い思いに楽しむ。下部の所1ヶ所



鳥海山の大斜面を滑る…菊地

だけクレバス状態の所があったのでまき道をして樹林帯入って手間を食ってしまった。そうこうして祓川の駐車場に着いた。まったく下までスキーで下る事が出来、楽しく気持ちの良い滑りであった。

駐車場にpm1:00頃到着。遅い昼飯を食べ、そして今後のプランを立てる。もっと北へ向かえば低気圧の影響がそんなに出ていないだろうと、低気圧から逃げるように次の目標を秋田駒ヶ岳に決めて、これより200km近く離れている乳頭温泉へ向かった。

当初は一般道を行くつもりだったがなにぶん時間がかかるので湯沢より高速に乗り、大曲インターまで飛ばす。現着して今夜のテントサイトを探す。探すことではうまい菊地が幾つかある内の営業を終えたスキー場の駐車場をテントサイトに決めた。しかし、大きな駐車場のためか？ある一人の兄ちゃんにはサーキット場に見えるのか？ものすごいタイヤのきしみ音と共に爆音を立ててブン回っていた。何回も何回も。でもよく見ると実にうまい。まるでプロのテストドライバーようだ。そこで口の悪い中島氏はあんな運転をしていれば1回でタイヤは駄目になるだろうから、『多分どこぞのタイヤ屋の馬鹿息子がやってんだっべよ』との一言でかたづけしてしまった。

酒を飲む前に、乳頭温泉の中では一番大きい黒湯へと向かう。夕方なので小屋の人達はお客さんの夕飯作りで忙しく働いていたので、我々は手間をかけては悪いと思

いそ〜と汗を流してきた。テントサイトに戻ると、さっきの兄ちゃんも帰ったようで静かな駐車場となり、テントの中で酒を飲みながら語らい、いい気分で酔いが回りゴロゴロしていると、夜の10時頃外は雨がザーザーと降りだしてきた。その雨と共に夕方の兄ちゃんが今度は仲間を連れて又やって来た。

車のライトで駐車場の全体を照らし出し、それを照明にしてその中でまたさっきの兄ちゃんが仲間の中でタイヤのきしみ音を響かせ、爆音と共にブン回っている。我々は間違えて車が横滑りして巻き添いを食らうのではないか思い、恐怖で気が気ではなかった。そんな恐怖を感じながらいるとテントの中も風雨の為か水が垂れてきた。次第にテントも飛ばされそうになりこのままでは、床上浸水状態になってしまう。兄ちゃん達も夜の11時頃引き上げてしまったので、我々も急いで水浸しのテントを撤収してグレンデのレストハウスの下へ逃げ込む。そしてデリカの車中で寝た。

次の日。遅い朝を向かえた事。昨夜の事もあり、雨が上がったがコンデションがかなり悪いとの事で、テレビでお馴染みの乳頭温泉「鶴の湯」へ向かい、白湯につかり、黒湯に入って赤くなって茨城に帰ってきた。

(菊地 記)

赤谷(7カタン)尾根 (剣見るなら赤谷山で)

1998. 5. 2~5

パーティ L本図一統、坂本恵美子、古山正文

5/2。馬場島指導センターの話：『雪が少ないので時間がかかるだろうから、赤谷尾根左のブナクラ沢の方が早くて良いのではないか？』。確かに馬場島駐車場から見える赤谷尾根を含め剣岳全体に雪が少ない。藪漕ぎとなることが予想された。

テレビの天気予報の話：『強い低気圧の接近で山は大雨、大風の天気になるでしょう』。確かに雲の動きが速い。藪漕ぎと悪天を覚悟し予定どおり出発。車道終点の取水口の防護壁の脇から、登り始めた。この道は大窓、小窓に向かう道らしい。追いついてきた“わらじの仲間”パーティは池の谷へと進んで行った。我々は、途中で赤谷尾根への踏み跡の急登へと別れて行った。この辺りは例年でも雪が少ないのだろう、藪は踏まれていてそんなにうるさくない。はっきりした赤谷尾根に出るとなま暖かい強風が当り始めた。尾根を忠実にたどって雪の上をサクサクと歩いて行けばよいはずだった。しかし、雪はなく代わりに雪に埋まっているはずの藪が邪魔をして難儀した。このままだとビバークの時の飲み水のための雪がが取れるかどうかの心配も出てきたぐらい雪が無かった。それでも1600m辺りで、雪がたっぷりとなりし

かも風がほとんど当たらない凹地にでたので、時間は早いがビバークすることにした。夕方から雨が降り始めた。

5/3。雨は降り止まず、出発を見合わせ、テント内でゴロゴロと過ごした。午後になると雨は上がったが、時間的に先に進むのは無理そうなので、結局停滞となった。雨で30cm位の雪の台地となったテントを隣に移動した。

5/4。赤谷山までは、雪はだいぶ多くなったものの、7対3で藪漕ぎのほうが多い。途中残置のロープがあった。赤谷山山頂は緩やかで、どこが山頂か判らなかった。ここから見る剣岳は剣沢や馬場島から見るものとは、苦勞して登ったせいか格別だった。赤谷山で、ようやくアイゼン、登攀具を身につけた。赤ハゲ、白ハゲまでは、緩やかな尾根ではあるが所々藪漕ぎを強いられた。赤ハゲ、白ハゲは両側が切れた尾根であった。雪が少ないのでモンキークライムでの尾根の直登と、崩れかけた雪壁を行く尾根の巻きを繰り返して進んだ。大窓への下りも完全に雪はなく夏道の下りであった。大窓に着いたときにはヘロヘロだったので、ビバークとした。小黒谷谷にテントが一張りあった。

5/5。剣岳経由で馬場島に今日中に下るのは時間的にも体力的にも（その原因は私だ）無理だ。大窓から下ることにした。急な雪渓を慎重に下った。池の谷出合い少し下で、雪渓が切れ始めた。ちょうど登ってきた3人パーティによると、右岸沿いに歩けるらしい。何ヶ所かロープが固定されていたところを通った。午前中に取水口の車道終点に戻った。

5月2日

馬場島(7:48) - 1565m(11:42)

5月4日

1565m(5:12) - 赤谷山(10:37~11:00) -
大窓(14:15)

5月5日

大窓(6:54) - 取水口(9:55)

(古山 記)



赤谷尾根からの大窓



雪の無い赤谷尾根

赤岩沢 & 雁ガ腹摺山

1998. 5. 10

パーティ L 本図一統、坂本恵美子、高木博行

♪中央フリーウェイ～調布基地を追い越し～山にむかつて行けば♪

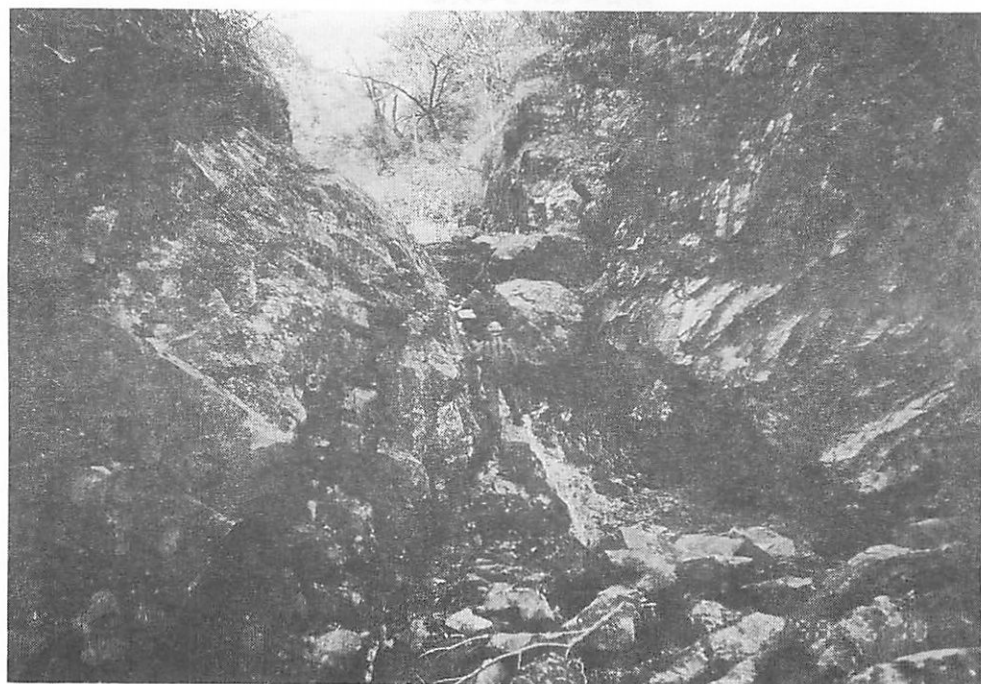
荒井由美の中央フリーウェイの最初の歌詞のとおり中央高速で山に向かう。雁ガ腹摺山の登山口のある大峠の駐車場でいつものようにビールを飲み就寝となる。

翌朝、赤岩沢の出合を目指し林道を下り始める。富士山がよく見えて気持ちのいい朝だ。林道の所々で富士山にカメラを向けるカメラマンの姿を見かける。林道にかかる橋の下から遡行を開始するが水量も少なく悪場もない。資料には五つ星が付いているらしいが本図さんは眉唾物かもしれないと言う。核心部のC、S滝が難しいらしい。ザイルを出すところもなく黙々と遡行していくとC、S滝にあたる。これだろうか？一応ハーケンが打っており、シュリングも掛かっているが簡単に越えることが出来る。しかしその先にも核心部らしきものはなかったのでどうやら核心部のC、S滝だったらしい。遡行を続けるとすぐに水も涸れ乾いたスラブが現れ、ここでハーケンを打つ練習やビレイの練習をするがハーケンが効きすぎてなかなか抜けなくなる。一通り練習が終わるとヤブを漕ぎ黒岳への縦走路へ出る。山頂で靴を履き替え大峠へ下る。昼食は雁ガ腹摺山の山頂で富士山を眺めながら食べようとなる。

る。五百円紙幣の裏写真の富士山は、雁ガ腹摺山（1857m）の山頂より撮影したものらしい。本図さんは五百円紙幣を持参してきた。坂本さんの足についていけず息も絶え絶えに山頂に着くと雄大な富士山がよく見えた。手前にはゲレンデで有名な三ツ峠も見えた。山頂で昼食を済ませ下山後、イワナ釣りに出かけるが、若き日の本図さんが遡行した豊潤な溪は今では林道が通りダム工事が始まっていた。地図で釣れそうな沢を探すが釣果には恵まれず帰路についた。

大峠(7:30)－黒岳山頂(10:00)－大峠(10:30)－雁ガ腹摺山(11:30)－大峠(13:00)

(高木 記)



赤岩沢に行く



雁ガ腹摺山にて…500円札の写真をとったところ

はじめちゃんの思い出日記〈Part 4〉

(御神楽岳湯沢奥壁ダイレクトスラブ)

御神楽岳(1,387m)この山はあまり人に知られていない山だ。名前から想像すると賑やかな感じがするが、会津と越後の国境に位置し周囲の山々に隠れるようにしている。その東面には雪崩に磨かれた広大なスラブ群を有していて、一部の登山者、クライマーに良き登路を提供してくれている。我々もこのスラブ群を知った時から心の隅に『気になる山』の一つとして忘れられなくなってしまった。モルゲンロートに染まり燃えるような岩壁を見つめていると、壮大な大自然の息吹が感じられる。湯沢の中に入っていくとそこは雪と岩の世界で、この山が1,400mにも満たない高度とは信じがたい。5月末なのに谷筋には雪渓が豊富で今日はその上を登り簡単にスラブに取付く事が出来そうだ。雪渓が消えてからのアプローチは、滝が露出して悪くなり時間を要するので、夜行日帰りの山行は雪渓が残っている6月中旬頃までが適期と思われる。今日は我々を含めて3パーティしかこの湯沢奥壁に入っておらず、ダイレクトスラブは我々だけである。下から見上げるダイレクトスラブは500m以上あるような長いスラブだ。凱旋門みたいな所からスラブに取り付き、最初は安全を期してザイルを使用するがすぐにその必要は無くなった。ザイルをザックに入れ、各自

好きな所を登っていく。カンテを登る者、凹状を登る者、すべて直登する者、トラバースばかりしている者、こんなに楽しい岩登り、こんなに楽しい山登りは久しぶりだ。だがスリップしたら取付点まで止まりそうもないが、そんな事は少しも頭の中に浮かなくてこない程、素晴らしくフリクションのきく岩である。ノーザイルで駆けるようにして登ってきたので足首が痛くなる頃、終了点に到着。取付点から約2時間の登攀だ。

ここから眺める御神楽沢奥壁は、今日我々が登った湯沢奥壁と比べても遜色ないスケールを誇っている。上部には広大なスラブ群を有しており、

『次はこのスラブを登ってやるっ!』

と密かに心に決めて、ギラギラ照り付ける初夏の太陽の下、充実感で一杯になったザックを背に栄太郎新道を下つていった。

1977年5月28日

(本図一統、木村一、吉井清二、藤原雅一)

(木村 記)

救助訓練（古賀志山にて）

1998. 6. 21

参加メンバー 古山正文、木村一、菊地光夫、笹平孝、坂本恵美子、高木博行、吉田信一、
生井一男

『♪何だかほんとに安心したよ～無茶して心を傷つけたら～果てない夜は切なさ～孤独に抱かれてあの人の～優しさを胸に泣きまくれ～どうにもならない悲しみの～強い風に今立ち向かってゆく～遙か彼方を目指した旅人よ～いつか再び君に会うまでは～どうか笑顔を決めよう～ま～あ～♪』

と清々しい朝日を受けながら車のラジオから流れてくる爆風スランプの「旅人よ」を一緒に歌いながら車を走らせていた。

朝から陽気に歌など歌って一体、おまえは何処に何しに行くのか？という、実はACC-J茨城恒例の救助訓練に参加する為一人車を飛ばしていたのだった。他のメンバーは昨日の晩に出発し、もう古賀志山にいるはずである。昨日の晩の出発では都合が悪い私は、今日、現地で合流する事になっていた。アップテンポなリズムにのって快調に車を走らせ、途中で食料を買い出し、昔良く通った道を昔を懐かしく思いながら古賀志山の入り口に有る勤勉屋（思わず懐かしく思ってしまうのは私だけだと思うが…）の道に入って何時もの所に車を止めて、古山さんに指定された訓練場所に向かい山路を一人登っていった（多分もう訓練は始まっていると思うが…）。

『救助訓練の舞台は何処かいな、はあ、何処かいな。おお～い、何処だあ～、一体何処にいるんだあ』と古賀志のゲレンデの右側を登って、対岸の斜面を回り込むように登っていくと、人の話し声が聞こえてきた。その方向に登っていくと、いた。いた。ザワザワとした声の中、古山さんが訓練のレクチャーしていた。メインザイルにブルージックをセットし、皆、かなり訓練も進んでいるようだった。

『お早ようございます。どうも、遅れまして』と挨拶を交わす。ようやく先発隊と合流でき、まずは訓練の様子を見ながらザックをおろし一休み。

『遅かったんじゃないか？もっと早く来るかと思ったんだけどね』と言われながら、よくメンバーを見回すと、あれ？何かどっかで見た事あるオッチャンがいる。木村さんがその人に『信ちゃん、〇×△』と話していたのを聞いて、そうか、吉田さんかと分かったのだが、何故ここにいるのか不思議である…。木村さんに訪ねたら、吉田さんは久しぶりに本園さんに会いに来たそうだったが、当の本人は身体不調で今回リタイヤなので空振りに終わってしまっただと話していた。そんな話を聞きながら訓練の準備を整えた。

それじゃとブルージックをセットして登ってみる。この時の事は20代前後にゲレンデに一人で練習に行っていた時、いやという程やったので慣れたものである。それでなくても西上州にあるミドリ岩北西壁開拓時にユマールを使って登っていたので、目をつぶってもこんな事は出来る。楽なもので程なく終了点到着。その後ハンマストでピナ懸垂し、途中で固定し両手をフリーにする事を行なった後、遭難者を負ぶって懸垂下降とそのサポート等といろいろな事を訓練した。この時に、我々のすぐ隣でフリークライミングをしている数人のグループがいた。時たま、私達も気をつけているのだがザイルを操作して落石を誘発してしまい、その落石に彼らは「むっ」としていたようだった。

私は以前からフリーの人達はなぜヘルメットを冠らないのかなと不審に思っていた。（ファッション性から冠らないのかと思うが）確かに人工壁でやる場合は、落石は起きないかも知れないけど、自然の岩場では落石がないという事はないと思うのだが、仮に落石が無くても、自分が落ちたりした時、頭を打たないとも限らないと思うのだが…。もっとも落ちて大丈夫な様にザイルをクリックする間隔は短く取っているが。私もフリークライミングをやっている時は（人工壁の場合）ヘルメットはしないが。まあ、百歩譲ってゲレンデなら分かるが、たまに一ノ倉沢に入っていくと、多分フリーの人だろうとは思いますが、ここでもヘルメットを冠っていない人を見た事があった。こういう人達は危機感というものが無いのか。やっぱりファッション、遊び、ゲームといった感覚なんだろうか？危険回避とは別ものだと思うが、如何なのかが…。確かに登山は遊びで趣味の一つだけれど。私が山を始めた頃、特に岩登り、ロッククライミングという事を始めた時は、もっと緊張した感じだった。いつも死と隣り合わせといった感じがあった。だからゲレンデでも常に本チャンと同じに設定してヘルメット、ザックは担ぎ、ザックに石ころを入れて練習したもんだった。

ここで一つ疑問がある。ここ（ゲレンデ）でやっているフリークライミングはあくまでも技術、テクニックのレベルアップで、一ノ倉沢といった本チャンの時は変わりアルパインスタイルになるのか？。いやここがメインスタジアムで一ノ倉沢といった所には行かないのか？同じ岩場で全く違う種族が集っている。岩登りも多様化した時代なのか。これは一方向的な見方だが、彼らからは我々はどう見えたのだろうか？視点を変え

ると見方、考え方も変わってくると思うが…？。おっと勝手な話して脱線してしまった話を救助訓練に戻します。

一通りみんな訓練を終了したので、懸垂で下に降り大休憩。だいぶ遅い昼食タイムになった。昼飯を喰っていて、さっきからやたら気になるのがすぐ上を飛びまわっているパラグライダー、いやパラバントというのかだ。本当に優雅に楽しそうに飛んでいた。それも相手の顔が分かる位すぐ近くを飛んでいる。私も以前やってみようかと、一寸調べたのだが一人ではなかなか踏ん切れなくてやらなかったのだ。ここ古賀志山は、パラバントのフライト基地が有り、数十機が群れのように飛んでいた。まるで怪鳥の軍団のようであった。機会があれば今度はトライしたいものだと、羨望の目で見ていた。おっと又話がそれてしまった。

昼食後、隣のフリークライミングの登りを見ていた。連中は、かなり厳しい所を登っている。手足に吸盤でも着いているんじゃないか思ってしまう登り方だ。そんな光景に触圧された訳では無いが、我々も一寸フリーをやろうと高木に頑張ってもらってリードしてもらい、フリー用のベツルにザイルをクリックしてもらった。その後、出だしが逆層でかぶっている所をみんなで何処まで登れるかトライした。まずは昔のスター吉田さんが取り付いた。下で見ていると（頭で考えていると）簡単に行けそうなんだが、難しそうで出だしのかぶっている所を越せずに苦労していた。3mくらい登っては力尽きて落ちてしまった。その後、木村さん、笹平、坂本(寛)がトライしたが、いい所までは行くが、逆層帯の所を越せず、右上しているクラック沿に行けなかった。

『それじゃ、私が行ってみましょう』とラバーソールを履き、生井がトライする。取り付くまでは簡単だろうかと見ていたのだが、何の日頃のトレーニング不足を披露する羽目になった。1回落ちたもののどうにか逆層帯の所をクリアし右上しているクラック沿に登って行き、上のテラスの手前まで行き2ヶ所ザイルをクリックして距離を伸ばした。がテラスに抜ける所で力尽き転落。手がバンバンになったので、ローダウンし取り付きまで下りた。その後吉田さん、木村さん、笹平と再度トライし、最後に巨漢高木がバワフルな登りで上のテラスまで達した。彼の登り方は力強く、その力強さは長浜さんを思いださせた。が、彼はそれにテクニックが加わった感じだ。

救助訓練、岩トレも十分に練習したので時間的にもういいだろうと帰途に着く事にした。

一人で帰る道すがら、古賀志山の上を舞う数々のパラバントがまるで、恐竜時代に飛んでいたプテラノドンの様で圧巻でした。興味の有る人は一度、岩トレに

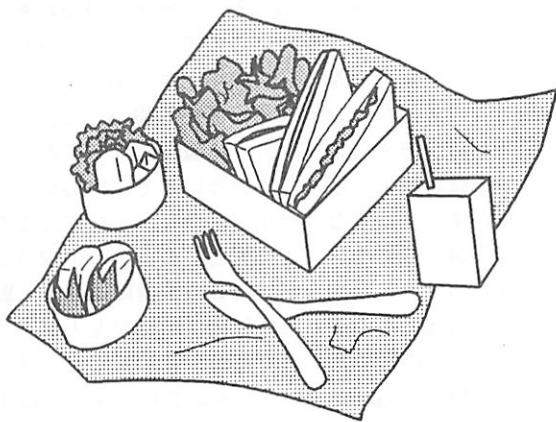
来たらどうでしょう。

今回の救助訓練は古賀志山で行なったが、一つの団体の救助訓練も必要だが、以前行なったような岳連での救助訓練も必要ではないかと思う。

しかし、ここで一つ問題が有ると思うのだが実際に救助訓練に参加する人間は今回も同じだと思う（自分はあまり参加していないのでこんな事は言えないが）。現役で活躍している人か、ロートル会員かでその人数は極めて少ないと思う。有りえない事だが、その団体の主力メンバーが遭難事故にあった場合、それに対処する人材、人数は難しくなっていると感じる。（もしかしたら殆どロートル会員になってしまうのではないだろうか）実際は、それらの対処は何らかの形で処理されると思うが……………。

幸いな事に近年そのような遭難事故が発生していない。そんな諸々な事を考えると、救助訓練は訓練だけで終わってほしいものである。

（生井 記）



逆・深夜鈍行 (中編)

イスタンブール～アンカラ～エルズルム～タブリツツ～テヘラン
～メシエット～ヘラート～カンダハール～カブール～アフガン・
パキスタン国境



パーティ 中野融、嶋村幸夫、本園一統

今回は後編として日本まで書くつもりでしたが、編集長から三部作にしろとの命令が有り、前編、中編、後編に分けました。今回は中編としてアフガニスタンまでを書きます。前編をお読みでない方はR&V27号をご覧ください。

ウスクダラで鈴木と別れ、一路アンカラに向かう。トルコの首都アンカラとイスタンブールを結ぶ道は、日本でいえば国道1号線みたいなもので、トルコの大動脈である。草原のような土漠のような所を通っている。交通量も多く（トルコ内では）、オンボロトラックやオンボロバスがすごいスピードでぶっ飛んで行く。我々がオベル1000GTも時速80キロで走っているがどんどん抜かれてしまう。うちの車も120キロまでは出すことができるが、100キロをオーバーすると車体全体にガタガタと振動が起こり、突然車体がバラバラになってしまう恐怖にかられる。又、この先道中も長いので、大切に扱わないと我々も野垂れ死にする恐れもでてくる。それにこの車が売れなかったら3人共ホームレスとなり、この中近東の国々をさまよいつねなければならなくなる可能性も強いのだ。

この日の夕方までにアンカラに着いたはずであり、トルコでは野宿は一度もしていないので、何処かのホテルに泊まったはずなのだが、残念ながら私にはこの部分の記憶が全くない。この先もこのように記憶のない部分が出てくると思うが、読者の皆様にはお許し願いたい。実は我々の旅した数年後、嶋村の友人がアジアハイウェイに行きたいので資料を貸してくれと言ってきた。貸してあげたのだが、その資料をすべて紛失してしまったのだ。各国の道路地図はいくらでも手に入るが、それに書き込んであった記録はもう戻らない。他の人から見れば汚い道路地図かも知れないが、私にとっては大切な宝物だったのに、今思えば残念でならない。

アンカラではどうしても片付けてしまいたい仕事があった。それはS氏に頼まれ、コペンハーゲンで仕入れたある物を、日本に送ってしまいたかったのだ。ある物とは、ここで具体的に書く訳にはいかないが、当時日本では手に入れることが非常に難しかった成人向けの物と記しておこう。ヨーロッパでは国境通過は簡単だったが、トルコに入国するときは荷物の検査が厳

しかった。これから益々検査が厳しくなることは目に見えている。もし、ある物が見つかった場合、国によってはどんな刑に処せられるかわからない。S氏のせいで俺が刑を受けるなんてごめんである。このある物を郵便局から送ろうとしたら、中身は何かと聞いてきた。私は咄嗟に「マウンテンアリングマップ」と答えた。どうもこれがまずかったらしい。局員がハサミを持ってきて中身を確認すると言ってきたのである。

『オーノーノー、オープンだめ、ベリーインポートマップ、返してちょうだい』
局員は、こちらで又綴じるから大丈夫だと言っている。『ノーサンキュー』

と答えながら慌てて局員から奪い取るように取り戻し外に出た。後になって考えてみれば、地図は軍事的に見ると重要書類である。島国日本人の浅はかさを反省した。それを見ていた中野が笑いながら

『たんちゃん、ずいぶん慌てていたな。話していたのは何語？英語、日本語、めちゃくちゃだったよ』

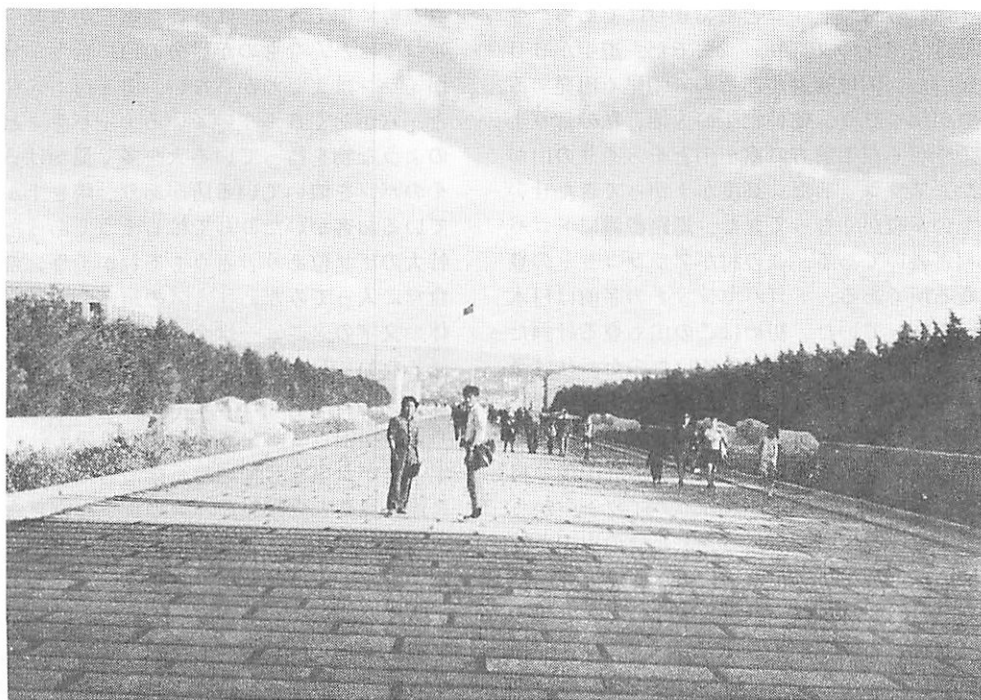
私はすかさず

『あれ、とおるちゃん知んねえのか、あれはボ○ノ語って言って全世界共通語だっべよ』

と言って大笑いをした。結局このある物はエアメール六通に分けて送ったが、帰国後すべて無事届いていることを確認している。

翌日アタチュルク廟を見学する。屋上からみるアンカラは、同じトルコ内であってもイスタンブールとは雰囲気まるで違う。アンカラは内陸、イスタンブールは海沿いと気候の違いもあるが、イスタンブールは騒々しくて活気があり、挨拶がかった。アンカラは緑多く静かで落ち着きを感じる。悪くいえば活気がない。アパートなのだろうか、白壁とレンガ色の屋根で四階建の同じような家が並んでいる。しかし、郊外に目を転ずれば、赤土の露出した山の斜面に土で造ったマッチ箱のような家がひしめき合い、何処かの遺跡のような感じだ。雨や地震にはひとたまりもないであろう。

アンカラにはそんなに魅力を感じなかったので1泊しただけで出発する。目指すは450キロ先のシバスだ。高原を時速80キロで爆走。簡易舗装で道はあまり良くないが、なんせ交通量が少ない。鶏が放し飼いにしており、日本では私が幼少の頃の風景だ。動物飛び出し注意の標識がやたらと目につく。小さな集落に



アクチュルク廟にて・・嶋村・中野

差しかかったとき、10羽位の鶏の群れが飛び出してきた。ブレーキをかける間もなく轢いてしまった。バックミラーで見ると、少なくとも1羽は即死している。一瞬いろいろな考えが頭の中を巡った。この辺では鶏は重要な家畜に違いない。法外な金を請求されても金はない。見回した感じではこの集落に車はありそうにない。次に私の起こした行動は、アクセルを目一杯踏み込んでいた。

シバスには時刻到着。寒くてとても野宿なんかする気になれない。ホテルは労せず見つかり、町に食事にでた。レストランらしき小さな店に入ると、そこには青年から老人まで10数人の男達がチャイを飲みながら屯していた。店に入るや全員の視線がこちらに集中した。観光地でもないシバスに日本人が来ることなんて殆どあるまい。後はお決まりの質問攻めである。何処から来た？何をしに来た？年はいくつだ？子供じゃないのになぜ髭をはやさないんだ？これから何処に行くんだ？トルコは好きか？これが旨いからこれを食え。言葉は全く通じない。すべてジェスチャーである。まるで宇宙人でも来たかのように物珍しがられ、ゆっくり飯も食べていられなかった。オリーブ油を使ったものだと思うが、煮っころがしみたいな料理は、私にはヨーロッパの物より口に合った。

翌日も大快晴。ヨーロッパを出てから連日快晴だ。だけどこの寒さはいったい何なんだ。アンカラでは半袖だったのにシバスはセーターを着ても寒い。近くの山を見てみればそれもそのはずで、雪で真っ白ではな

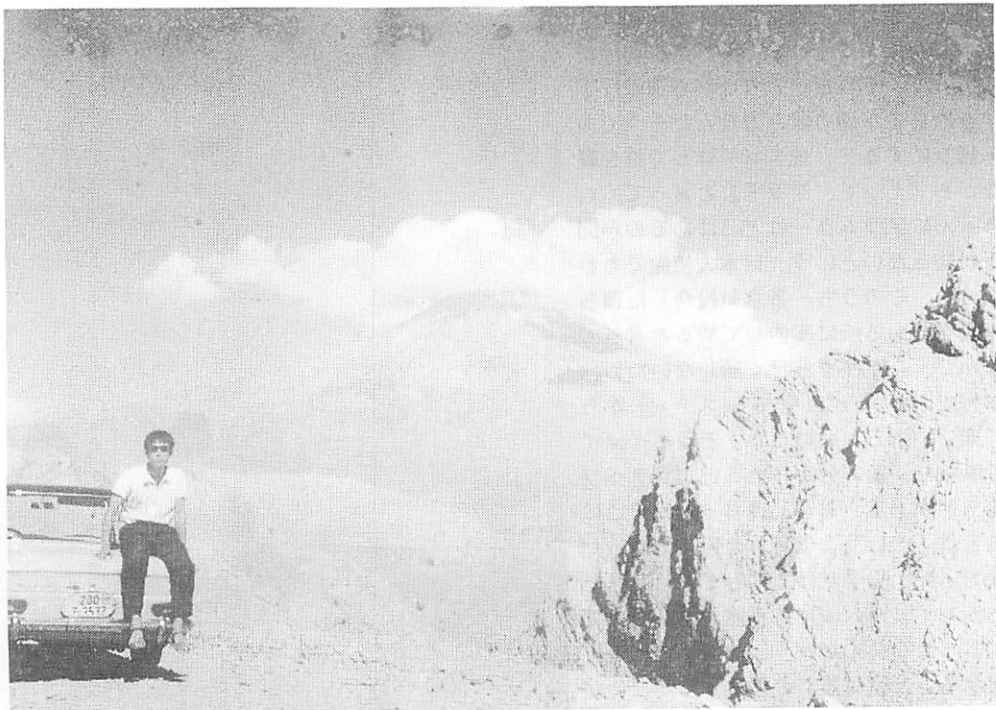
いか。一日で夏から冬に入ってしまったのだ。エルジンカンまで180キロの標識を見る頃は、路肩にも雪が残っていたが、路面にはなく助かった。チェーンを準備していなかったのだ。実は計画ではヨーロッパハイウェイ～アジアハイウェイに雪は想定していなかった。こんな寒い所はないと思っていたからである。今日の目指すところはエルズルムというシバスから東に450キロの町である。道路はいつの間にか舗装が切れ、砂利道に変わっていた。これがヨーロッパハイウェイと言えるものなんだろうか。またトルコに入ってから町と町の間が遠く、給油スタンドが100キロ以上もない状況が続くので、20リットルの予備燃料と10リットルの飲料水を持つようにしていた。車窓の景色はスペインのそれと同じで、草原＋土漠の荒涼とした乾燥大地がどこまでも続いていた。エルズルムには暗くなるころ到着した。エルズルムはかなり大きな町であり、道路は広いが車はあまり通らず閑散とした町だ。アンカラよりも増して活気がない。シバスよりも寒いが、この町の高度が1800m以上あることを思えば領けた。広い通りからちょっとした路地を入った所にある安ホテルを確保する。ここのホテルにはシャワーが付いており、何日振りかで体を洗えるがお湯は出ないので寒さの為とても使う気にはなれなかった。夜、飯を食いに町に出てみるが、何処に行ってもシバスと同じ状態になってしまう。ホテルまで私達の後を付いて来る人もいたりして、まるで芸能人みたいであった。

10月7日。今日でトルコともおさらばである。今日の目的地はイランのタブリッツまでだ。道中が600キロと長いし、国境通過があるので朝早く出発する。風景は草原が無くなり、乾いた土の大地、私の言う土漠である。やがて左手前方に富士山とそっくりの山が見えてきた。アララットだ。高度が下がってきたせいだろう、だいぶ暖かくなってきた。道路標識にドゴバヤジット村と書いてある。この村がアララットの登山基地になる所である。ドゴバヤジットの名前は日本にいる時から知っていた。初めはこの山も登る計画だったので、日本でいろいろ調べてきていたのだ。私は金がないかわりに、国内では各国大使館や登山家に連絡を取り、アジアハイウェイと山の資料を集める役目になっていたのである。やがてグルブラック（国境の村）に着いた。この道はここでヨーロッパハイウェイからアジアハイウェイと名前を変える。トルコの出国手続きは簡単に済んだが、バザルガン（イラン側の地名）でのイランの入国手続きは、うわさに聞いていた通り厳しいものであった。アテネで会った日本人は、何をしたのか忘れたがイラクで監獄に3日間ほどぶち込まれたと言っていた。その日本人の言うことには、イラン国境で入出国の際、麻薬が見つかるのと即銃殺だとのことである。車の荷物は一旦外に出し検査を受ける。その後、係官はボンネットや車の底を叩いて、二重になっているかどうか調べるのだった。その検査を銃を持った二人の兵士に囲まれて受けるのだから、いやがおうでも緊張してしまう。OKの言葉をもらった時は一度に疲れがでてしまった。とりあえずバザルガンで飯代、ガソリン代、+αの金をイランの通貨リアルに交換する。なせ少ししかチェンジしないかというのと、それはブラックマーケットのことを考えてのことだ。だからといって、ぜんぜん交換しないのでは公のレートがわからないのである。ここで又読者には申し訳ないが、イラン国内でブラックマーケットがあったかどうか、はっきりした記憶がない。あったような無かったような、忘れてしまった。ただトルコで会ったようなインチキ野郎にだまされないよう神経質になっていたことは事実だ。

イランという国はパーレビ国王の国だなと強く感じる。それはパーレビの写真があちこちにあり、ちょっと食傷ぎみになるくらいだ。それがこの何年後かにはホメイニに倒されるなんてパーレビ本人も夢にも思っていなかっただろう。タブリッツに着く頃には真っ暗になってしまった。タブリッツは暑くて、又一日で真冬から真夏に戻ってしまった為と、毎日何百キロも走ってきた疲れが重なってか体がだるい。とにかくどこでもいいから安そうなホテルを探さなくては。繁華街近くのボロホテルにチェックインを済ませ、食事をしよ

うと町に出てみた。けっこう賑やかな町のような。トルコではどんなものが自分の口に合うか分かってきたがイランはまだわからない。町を行く人々を見てみると、穴がたくさん空いているチャパティとパンの間のような物を持っている人を多く見かける。通りにはそのパンを焼いている店があり、焼き上がるのを待っているお客がいたりして忙しそうであった。大きさは特大のビザ位あり、どうもあれがイランの主食らしい。食堂に入ってみた。ミミズの這ったようなアラビック体の文字のメニューは全く読めない。言葉はぜんぜん通じない。したがってどんな食べ物があるのかわからない。店の主人が注文を取りにきたが、何を注文したら良いか困ってしまった。となりのテーブルに二人のボリスが食事をしていた。他に客はいなかった。ボリス達を見ると先程見たパンのような物を食べている。指を指して「あれ三つ」と指を3本出すと主人はすぐにわかってくれた。出てきた物はパンと紫色した生タマネギと塩だけ。どうやって食べるのかわからない。するとそれを察して、主人とボリスが、こうやって食べるんだと教えてくれた。パンを適当な大きさにちぎって、その上にバラバラにした生タマネギと塩を置く。それをパンでクルクルと巻いて食べるのだ。はっきり言って旨くなく、味はタマネギの辛さと塩のしょっぱさだけでやっとな食べた。これが今になってわかったことだが、最近日本でも売られているナンである。でも今日本で売られているナンと当時のイランのナンとは、味に格段の差があったことは言うまでもない。タブリッツにはアイスクリームも売られていた。

10月8日。テヘラン（600キロ）に向け出発する。周りはいくら走っても景色が変わらず、カラカラに乾燥しきった土漠が続くだけだ。産油国だけあってガソリンは安い、思いの外スタンドが少ない。もっとも土漠の中にスタンドを造ってもしょうがないのだろう。今はすっかり影が薄くなってしまったが、当時はオベックといえど世界中がその動きを戦々競々として眺めていたものだ。イランもオイルマネーがガバガバ入り、金回りが良いようで至る所で道路工事が行われている。先行車があると埃で前が全く見えなくなり止まらざるを得ない。イラン国内のアジアハイウェイも後数年も経てば素晴らしい道路になるであろう。心を和ませてくれるのはパリで買ったラジカセから流れるミュージックだけだ。もう何百回と聞いているが、不思議にも飽きないのである。ラジカセのメーカーはビクターであるがヨーロッパではニビコというらしい。このニビコもやがて我々の食料に変わってしまうだろう。たまにドンという音がするが、イランの鳥は日本の鳥と比べるとニビコようで、車のフロントによくぶつかるのだ。日本では高速で走っても鳥がぶつかるな



ディマバンドが見えてくる（ディマバンドをバックに本図）

んて聞いたことがない。バンパーの上で何羽もご臨終させてしまった。前方にはイランの最高峰ディマバンドが雪を抱いて見えている。三人とも暑さと疲れによるものか体がだるくて食欲もあまりない。この日はテヘランまで行き着けずカラグの先で野宿となった。

シートの上で横になると疲れがどっと出てくる。すると中野が話しかけてきた。

『たんちゃん、猛獣ってこんな所にはいないんだっけ』

『虎とかライオンのことか？、それはいないよ、サバンナみたいに草原になっていて、草食獣がいなければ肉食獣もいないはずだよ』

『ガラガラヘビは？』

『あれはアメリカの方にいるだけじゃないのかな』

『サンリはいるよね』

『ん、サンリはいるかも知んねえな』

この話をしてから私は寝付きが悪かったが、当の中野はグウグウ寝ていた。翌朝、目が覚めるとシートの上には埃が真っ白に積もっていた。

テヘラン手前からフリーウェーを飛ばす。昼頃にはテヘランに着いた。テヘランはアーケイドありショーウィンドありの近代都市だが、ちょっと裏通りを行くとやはりイランである。テヘランには、アラムクーの登山を含めると、長期滞在の可能性があるでホテルへの投宿は経済的にできない。駅のインフォメーションに行きテヘランの地図をもらい（もちろんタダで）、オートキャンプ場を見つけ、そこをベースにすることにした。

オートキャンプ場はテヘラン郊外にあり、水道、トイレも完備で安くてとても気に入った。利用者が外国人ばかりのためか、キャンプ場内は治安の面で比較的安心できる点も良かった。イギリスからオートバイで来たという単独のおじさんがいた。嶋村が、さすがグレートブリテンは違うと感心していた。

夜、久しぶりのテントで寛ぎながら、これからの行動予定を話し合った。まず銀行に行き私の円をリアルに交換する。アフガニスタン大使館に行きアフガンビザ申請をする。日本大使館で日本からの手紙を受け取る。アラムクーの場所を確認し、地図、ルート図、下降ルート等を調べ、体調が良くなり次第アタックするということに決定。

次の日、銀行で一万円分リアルに交換すると、イスタンブールに親父から届いていた三万円のうち残りは一万円になった（イスタンブールで既に一万円は交換済み）。日本、アフガン両大使館の用件を済ませ、道に迷って裏通りを走っていると茶店（お世辞にも喫茶店とはいえない）があった。タクシーの運ちゃん達が一休みする所なのだろうか、チャイを飲んでいる。店に入ると一連の質問攻めが始まる。しかし相変わらず言葉はぜんぜん通じない。タクシーの運ちゃん達は気の良さそうな人ばかりだった。それは顔の表情を見ていればよくわかる。対日感情は非常によく、我々が日本人だとわかると、よく来たよく来た、と歓迎してくれた。チャイを注文し角砂糖を入れようとする、皆から“オー”と声がかかる。入れてはいけないという

のだ。チャイの通の飲み方はこうするんだと一人の運ちゃんが教えてくれる。それは、角砂糖を片手に持って、それをかじりながら別の片手でチャイを飲むのが通の飲み方なんだそうである。その通りにすると、皆ニコニコして首を縦に振りながら『グッド、グッド』と言ってくれた。運ちゃんにアラムクーはどこにあるのか聞いてみたが知らないという。日本大使館でもわからなかった。そのうち一番意気投合した運ちゃんが、我々をある所に案内してやると言っている。しかし、言葉がまったく通じないため、ある所が何だかわからない。ジェスチャーから女がいて楽しい所らしいのだが、どうもイマイチ不安で断った（後で分かったことだがテヘランには飾り窓があるらしく、運ちゃんはそこに案内すると言っていたようだ。今思えば断ったのは失敗だった。見学だけでもしておくべきだった。しかしイスラム国に飾り窓があるなんて、とても信じられないんだが）。チャイの代金を払おうとすると、意気投合の運ちゃんが『俺が払うからいい』と言っておごってくれた。

茶店で2時間ほど油を売った後、いよいよアラムクー探しを始める。ディマバンドは皆知っているがアラムクーは知らないという。ディマバンドだったら何処からでもよく見えるのだから俺にだってわかるのだ。アラムクーについて分かっていることといったら、グランドジョラスに似た大岩壁を持ち、氷河があって避難小屋があるという位なのである。私は一度だけ写真を見た事があった。アラムクーには氷河があるのだから雪山のはずだ。しかし見えるのは雪山はディマバンドしかない。他は赤土剥き出しの丸坊主の山ばかりである。途中、作業服を着た日本人と会ったが、やはり知らないと言っていた。この日は車で散々走ったあげく徒労に終わった。

翌日は視点を変えてエルブルース山脈を越えて、カスピ海側から探してみることにした。カラグから立ち木一本見られない土褐色の乾燥山地を登って行くと、突然青々と水を湛えたダムが現れた。久しぶりに見た水の青さは我々の心を芯から和ませてくれた。恐らくここがテヘランの水瓶なのであろう。峠を越し下って行くとみるみる景色めく変わり始め、ジャングルとまでは言わないが草木が生い茂り、日本にいたのではないかと錯覚するほどの緑の地帯に急変したのである。私が考えるには、これは日本の日本海側と太平洋側と同じで、カスピ海からの水蒸気を十分に含んだ気流がエルブルース山脈にぶつかり、北側斜面に多量の雨を降らせ、乾燥した空気が南のテヘラン側に下りているのではないと思う。いつもフェーン現象のため、テ



イラン…カスピ海に出る

ヘランの緯度は東京と同じ位なのに暑いのだと思う。やがてカルスに着いた。カスピ海沿岸の道を東に向かう。海岸沿いにはモダンな建物が立ち並び、柵みたいなものがあるがすぐには海岸に近づけなかった。これはテヘランの石油成り金達の別荘なのだろうか、海岸まで占領しているように見えた。ヌールという町でカスピ海の海岸に降り立った。カスピ海の水は塩辛いのか真水なのか興味があったので飲んでみた。はたしてどちらだったか？、その結果は塩辛かったのです。空にはドンヨリと雲が立ち込め山の偵察はできそうもない。その日の夜テヘランに戻った。

山を偵察しながらアモル経由でテヘランに戻った我々はアラムクーをどうするか相談、諦めざるを得ないだろうの結論に達した。これは日本での下調べが不十分であった私の責任である。考えてみれば日本だって富士山は万人が知っているだろうが、北岳は山に興味がない人は知らない場合も多いだろう。ディマバンドは皆知っているが、アラムクーなんぞ知っている人はいないのであった。場所は行けば分かると考えた自分が甘かった。でもそんな事より一番の原因は三人の体調

がおもしろくなく、モチベーションが低下していたため、登らなくてもいいやという気持ちが三人にあったからである。どうしても登りたければ必ず探し出せたはずだと今でも思っている。アラムクーが中止になった事で、明日アフガンのビザが下り次第出発する事にした。

アフガンへのルートは二つ考えられる。一つはカピール砂漠の北側を横断するルート、もう一つはエルブルース山脈を越えメシェットに出る北回りルート。我々は緑に飢えていた。この先砂漠の中をいやという程通らなければならない。ここは北のコースを選んだ。でも実際は思っていたほど緑は濃くなかったのだが……。

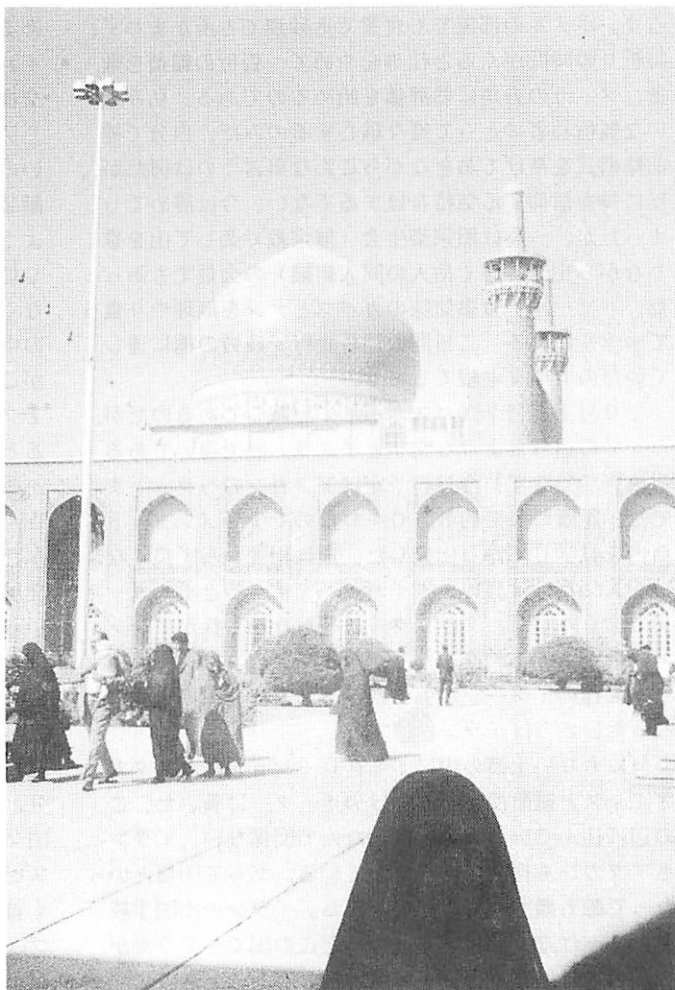
居心地の良かったテヘランともお別れだ。知り合いになったキャンプ場の人達と別れ、アフガン大使館でパスポートを受け取りテヘランを山登、夜を徹して950キロ先のメシェットを目指す。道は今までで最悪の状態になった。先行車がいると抜で全く走れない。至る所で道路が工事中であり、アラビック体で何やら書いてある。全く読めず直線を走って行き橋を渡ろうとした瞬間、橋がないのに気がついた。急ブレーキをかけたが間に合わず前輪を落としてしまった。前三分の一は宙ぶらりんで、後10cmも前に出たら川底（川といっても水は流れていない）に転落していた。さてどうしよう。三人ではなす術がないように思えた。しかし火事場の馬鹿力とはよく言ったもので、これを三人で

上げてしまったのだ。やがて夜を迎えた。洗濯板状態の道は、はらわたが煮え繰り返るようだ。どうしてこんな凸凹の道ができるのか不思議でもある。街灯一つない土漠の真真中で回りは真っ暗である。すると突然ガツンとエンジンが止まった。ライトも消えた。一体何が起きたのかわからない。スターターもウンともスーともしない。トランクからヘッドランプを取り出しボンネットを開けた。シマちゃんの出番だ。シマちゃん先生のお話しでは電気系統の故障だというが原因はわからないとの事。毎日毎日何百キロも走って酷使してるんだから車もストライキの一つも起こしたくなるわな。頭に餓死・渴死・いやなことばかり浮かんでくる。シマちゃんなんとかしてちょうだいよ、シマちゃんだけが預りなんだから、中野も私も折るような気持ちである。しばらくしてシマちゃん曰く

『ちょっとエンジンかけてみてくれる』
キーを回す。ブルルン。

『かかった、助かった、シマちゃんのお陰だよ、シマちゃんあんがとさん』。

嶋村の話では、いじっているうち直ってしまったので何処だかわからないが、振動で電気系統のどこかが接



イラン…メシェットのモスク

触不良を起こしたんじゃないかという事だった。どうだっていいの、直ればいいんだから、最後良ければすべて良しだよ。

サリ〜ゴルガンを経てイラン東部最大の町メシェットに到着するまで、まる二日を要した。メシェットにはコバルトブルーに輝く大きなモスクがあり、イスラム教シーア派の中心で、イラン全土から信者が集まってくるため賑やかな町である。モスクが見える町の中心部の安宿を探し、休を休める前に洗濯を終わった。嶋村がコーランを聞きながら

『ここは間違いなく中近東なんだな。随分と遠くに来てしまったなあ』

と感慨深く咳く。飯を食いに町に出てみた。全世界どこでも同じで、人の集まる所にはお土産屋があり、すごい活気だ。メシェットはトルコ石の産地でも知られているだけあって装飾品のお土産屋が多い。回教徒の国ではテヘランのような都会では別だが、田舎の方では女性を見かけることは殆どない。歩いているのは男ばかりで、女性が一人もいないということはちょっと異様である。回教徒ってどうしてこんなに敬虔なんだ

ろう。ホテルの部屋でも食堂でも砂漠でも所かまわず、お祈りの時間がくると仕事をやめて一畳位の織蓐を敷き、メッカの方角にお辞儀を始めるのである。私みたいな無信心者にとって唯々感心するのみだ。白分で神前結婚式を挙げておきながらこんな事言うのは何だが、私に神を信仰する気持ちはまるでない。今は辞めてしまったが、一時は照宗楽生会（無宗教で楽して山を登りながら生きていく岳人の同人組織）の会員でもあった。バザールで食傷気味のカバブとナンを無理やり食ってホテルに戻る。二日間の連続走行で疲労の極に達していたので早々と寝てしまう。

10月14日？（パスポートに記載してあるのだが、ミミズの這ったような文字とイスラム暦で書いてあるため判読できず）今日の予定はアフガンのヘラートまでだ。距離にして約350キロなので少しメシエット市内を見学してから出発した。道は相変わらず良くないが天気だけは良い。タイバッドをすぎるとボーダーまで20キロだ。アラムクーは登れなかったがイランという国も、あの楽しかったテヘランのタクシーの運転手達のイメージが強く残り、又来たい国の一つになった。さらばイラン。

何にもない土漠の中にイミグレーション&カスタムオフィスと遮断機があるだけのボーダーに着いた。この辺に住んでいる人達は国境なんて関係ない。イランもアフガンも自由に行き来している。だって国境といったって線も柵も何もないのだから。イランの出国手続きはあっけなく簡単であった。どこの国でもそうだが、入国者には厳しく出国者には甘いのである。逆にアフガンからイランへの入国時の検査は、極めて厳しいというのが中東旅行者の常識であったが、なるほどその様子がうかがえた。なぜこのボーダーが厳しいかというと、アフガンは麻薬が合法なのか違法なのか知らないが、いくらでも手に入るのである。イランはこの麻薬の持ち込みに神経を尖らせているのである。少し先にアフガンオフィスがあった。荷物検査なんていい加減なもので、一応見るだけといったあんばいだ。だけど、仕事は目茶苦茶遅い。2〜3分で済む事なのに、他の人に話かけられると、あーだこーだと話に夢中になり、ブイッと出かけたまま30分も帰ってこない。やっと帰ってくると、その時計はセイコーか？プレゼントしろ、とか言い出す。バカ言え！貰いたいのはこっちだよ、何か食べ物があったら食わせてくれ、と言い返したいがここはグッと我慢の子であった。ここはアフガンなんだとイライラを抑えて笑顔を作り、入国OKの返事を貰った時マネーチェンジをするかどうか迷った。車の燃料の残量はヘラートまではちょっと厳しいので給油しなければならない。アフガンにブラックマーケットがある事は知っている。ここで手に入れたアフガンの地図によると、少し先にイスラムカラーという村が

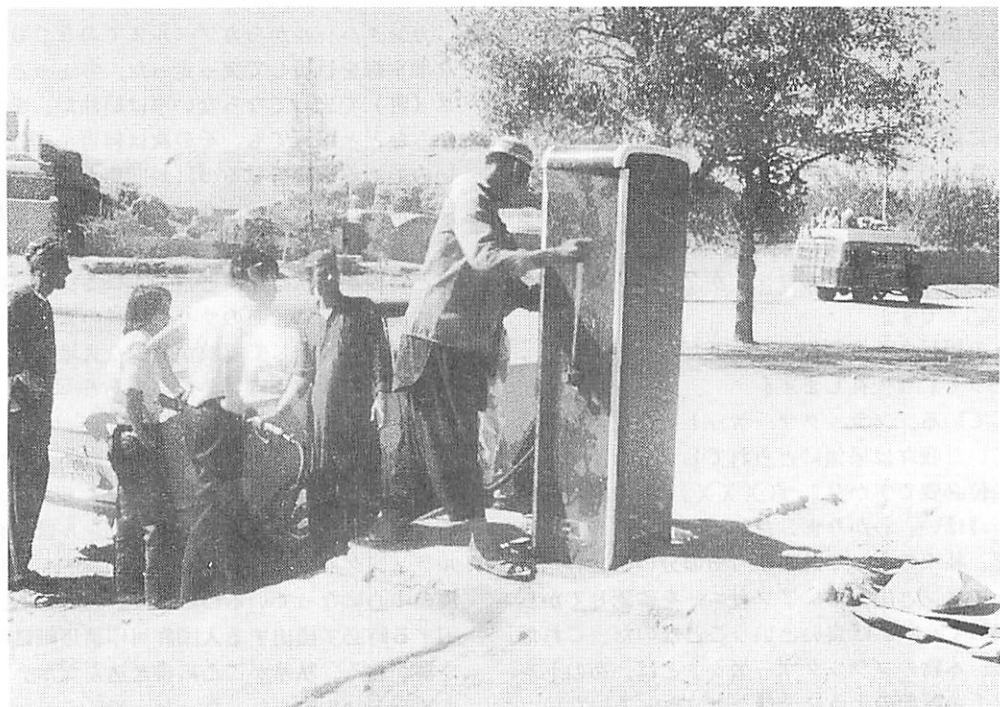
ある。そこのブラックマーケットでアフガニーに交換すればいいや、とボーダーでは手持ちのリアル分しか交換しなかったのが大まちがいだった。

アフガンはアジアハイウェイ中、道路状況が一番悪いのではないかと覚悟していたが、それほどでもない。舗装された所と砂利道とがあったがイランの洗濯板のような悪路ではなかった。走っている車はなく完全貸し切り状態である。期待したイスラムカラーには何もなく、燃料が心配になってきた。しばらく走ると土漠の中にオアシスが見えてきた。何という村かは忘れたがここにガソリンスタンドがあった。ところが我々はアフガニーを持っていない。ここに銀行はあるか尋ねると無いという返事。スタンドのおやじにドルでいいか尋ねたところ、だめだと言って請け合ってくれない。さんざん粘ったあげくドルでも良いことになったが、かなり法外な値段をふっかけられた。この辺に限らず発展途上国の旅は、こちらの弱みを握られたら絶対といていい位ぼったくられる。このガソリンスタンドは、ちょっとした広場に給油ポストがあるだけで、屋根もなければハウスもない。さらに手動式の給油設備だからえらく時間がかかるのである。荷物を屋根に満載したバスとトラック二台の次が我々の番だったが随分と待たせられた。すべてこのペースがこれから先の国々のスピードなのだ。道が良いのでかなりかなりのスピードで走ることができ、ヘラートには予定より早く着いた。ヘラートはアフガン西部の商業都市で、カブールが東京とすればここは大阪といった所だ。通りがかり人に「バンク、バンク」と聞くと指をさして教えてくれた。アフガニーを手にした我々の次にすることは宿探しだ。自分達に相応しそうな宿を見つけ料金を聞くと、な、なんと一泊50円であった。まあ〜しかし、50円の宿はやはり50円で、部屋は相部屋、ベッドもなくて南京虫とノミのいるカーペットが敷いてあるだけだった。シュラフカバーで寝たが、貴重品をシュラフカバーの中に入れて寝るのは防犯の面からもなかなかグッドだった。アフガンに鉄道はない。公共交通機関はバスのみである。だから道路の整備にソ連とアメリカが競争して援助してきた。ヘラートからカブールへのルートは三通りある。

その1。アメリカンロードと呼ばれる南の大都市（アフガンでは）カンダハールを通る南回りのルート。砂漠のど真ん中に行くが道が一番良い。

その2。マザルシャリフを通る道で舗装されている所は少ない（当時は）。この北回りのルートをソ連ロードという。

その3。ヘラートとカブールを結ぶ直線を行くルート。遺跡で有名なバーミヤンのそばを通る魅力的なヤイの簡単な朝食を済ませ出発。本日の走行予定距離は約550キロである。路面状況はここがアジアハイ



アフガン…手動式のガソリンスタンド

ウェー中一番良かった。土漠の中のコンクリート完全舗装道路をただ地平線に向かって一直線に進むだけだ。いくら走っても景色は変わらない。前方に見えるのは地平線だけだ。スピード感がなく120キロで走っても速く感じない。進行方向にどでかい湖がみえる。でもこれは辱気楼（本物の辱気楼では無く、俗に逃げ水という物）である事が分かっているので驚きもしない。時々絵本で見るようなラクダの商隊に会う。しかしこのアメリカンロードはタダではない。頻繁に遮断機があり通行料金を徴収される。頻繁といっても今私の手元に残っている領収書は九枚だから約100キロに一回という事になる。日本円にすると微々たる物なのであるが、近隣地区の重要な現金収入源であろう。所々にあるオアシスは心身共にほっとするもので、水のあるところ緑あり、人間も家畜もいるのだ。小川に沿って樹木が並木道のように生え、命の水である事をしみじみと感じられた。

120キロで走れば着くのも早い。カンダハールには午後早く入った。一泊120円のホテルを探し出す。これはベッドもあり三人部屋あるが、立派なルームといえる。ただトイレは小川の上に板が二枚渡してあり、これをまたいで用を足すのであるがこれにはちょっと参った。カンダハールは南部の商都で工業（と言えるものではないが）も農業も盛んな大オアシスである。アフガンの町すべてでいえる事であるが、道路が広い。というよりも、人も車も少ないので広く感じるのかも知れない。ホテルの近所の茶店では、水パイプを回し飲みするおじさん達が屯して怪しげな雰囲気漂って

۱۶۲

جلال آباد - تورخم دوات د مواترو

دتیریدو د محصول تکت

خاص دگر ندیو مواترو د پ ۰



قیمت شل افغانی ۲۰

Price Afs 20

دا تکت دیوخل دباره اعتبار کری

۱۳۷۱/۷/۲۵

アフガンのアメリカンロードの領収書

いる。50m位に一回、ハシシはいらないかと声をかけられる。いろいろな果物も売っている。この貧乏旅、一回でいいから賢沢しようとスイカを買い求めた。

ホテルに戻って洗濯をしていると、トントンとドアがノックされた。ドアの外には一見して金持ち、上流階級とわかる風貌をした紳士が立っていた。ターバンと奇麗に手入れされた髭が実によく似合う。

『マネーチェンジは必要ありますか?』『レートは?』『〇〇〇〇・です』

ヘラートの銀行より3割良いレートだ。

『中へどうぞ』『失礼します』

堂々としている。ブラックマーケット=違法=犯罪者と思っていた我々は呆気にとられてしまった。

『何ドル位必要ですか?』『〇〇〇〇・ドル程お願いします』『はい、わかりました』

と言って、札束の入った財布からその分のアフガニーを机の上にポンと出した。アフガニーを確認してからドルを出してくれれば良いということなのだ。これだ、これだよ、本物のブラックマーケットとは。あのトルコのインチキ野郎のように全然コセコセしていない。最後に『ご滞在はいつまで?』『明日立ちます』

『そうですか、もし必要でしたらホテルのマスターに話していただければいつでも来ますから』

と言って出ていった。そうか、ホテルから連絡がいくので私達が泊まっている事が分かったのか。ブラックマーケットとはどんなものかよくわかった。これが先の国々で大変役に立つことになるのである。

カンダハールからカブールまでの500キロも、唯々地平線を目指して突っ走った。ちょっとしたオアシス(町)で忘れてならない事は給油だ。まだ半分あるからなどと思っても、その次は何百キロ先かわからないのである。時折見るのは対向車とラクダの商隊と辱気楼だけだ。その他、今日は嬉しい物を見た。それは本物の砂漠である。今、自分達がいる所も一般には砂漠と言うが、私は土漠と言っている。私が勝手に決めた砂漠の定義は、あのサハラ砂漠のようなサラサラした砂だけの、そして風紋が奇麗な大地だけである。その風紋が右手遠くに見えたのである。ああ、俺の行ってみよう砂漠があそこにあるのだ。

午後早くカブールに着いたのでホテルを探しながら市内を車で走ってみた。テヘランもカブールも首都であるが、テヘランと比べるとカブールは田舎町だ。ビルディングも少ないショーウィンドーは皆無だ。物流の中心になっているのはバザールである。各国に入国する時必ず提出する入国許可申請用紙に宿泊先という欄がある。私達がここに書き込んだホテル名はいつもヒルトンホテルだった。だって、これから行く町にどんなホテルがあるか分からないし、何かを書き込まなければならないので、首都にはヒルトンホテル位はあるだろうという単純な考えからであった。我々を見ればヒルトンホテルの客かどうかすぐ分かるだろうに、そのことについて不審を持たれたことは一度もなかった。ようするに国境の係官にとってはそんなことはどうでも良いことなのだ。はたして本当にこのカブール



アフガン…地平線に向かって走る。

にヒルトンホテルなんてあるんだろうか。でもさすが首都だけあってカブールは他の町と比べると物価が高いのかホテルも高く、いくつか回った後決めたホテルは確か一泊2000円位だったような気がする。中心部からちょっと外れた所で、道路が広いので駐車の手配はないが、盗難の恐れが大きい場所だった。カブールの朝はセーターを着込むほど冷え込む。空港に向かう。インフォメーションでカブールのタダの地図をもらうためだ。ついでに日本大使館、パキスタン大使館、インド大使館の場所も教えてもらう。パキスタンとインドのビザを貰うためである。なぜインドのビザまで買おうとしたかという、パキスタンとインドは仲が悪く印パ戦争以来、国交がない可能性があり、アフガンで取ってしまった方が賢明と考えたからだ。パキスタン大使館にビザ申請後、日本大使館に行く友人からの手紙を受け取り、後は日本の新聞をむきほり読む。一週間遅れの新聞だが、自分達にとって日本の出来事を知り得る唯一の手段であった。食事は宿の前にある茶店というか食堂によく行った。食べるものは刀のような鉄板に羊のひき肉をくっつけたシシカバブーと飯とチャイであった。二日経つと、だんだんカバブーの臭いが鼻につき、喉を通らなくなってきたので果物を食べるようにした。ビザ待ち以外する事が無く、町をブラブラするのが日課であった。カブールではチャドルを着た女性を多く見かけた。イスラム国家で女性を見かけることは誠に少ない。当然話しかけることなんてタブーである。日帰りできる所にバーミアンという有

名な遺跡があることは知っていたが、誰に聞いても道路が悪い、治安が悪いと言われ断念した。あるときオイル交換の必要性を感じ、またタイヤの空気圧が下がっている事にも気づき、修理屋に行ったところパンクだという。修理を頼んだところ、ホイールからタイヤを外そうとしているので、私は慌てて

『ディス・イズ・チューブレス』

と言ったら、そんなこと分かっているというような顔をして首を縦に振りながら

『アイ・アム・ア・プロフェッショナル』

と言われてしまった。使う道具といったらハンマー、パール、ロープ位なもので非常に時間がかかる。日本なら15分で済むのを、バラバラにしてパンク糊を使い3時間もかけて直したのであった。今考えれば、この頃日本でもチューブレスは無かった様な気がするが、カブールでは町を歩いていると闇ドル交換屋（ブラックマーケット）によく声を掛けられる。正当？な闇ドル屋は必ず自分から先にアフガニーを出してくる。ドルを先にだせという奴はインチキ野郎である。レートも公より三割増しが限度で、五割増し、十割増しなんて言ってきたらインチキに間違いない。これは住んでいるうちに分かってくる知識である。我々のいるホテルの回りにはヒッピーが多く、あまり環境がよろしくない。別に危害を加える事など無いし、むしろニコニコして話しかけてくるのだが、なんか麻薬とかの仲間にされそうな気がするの、英語の話せない我々のひがみ根性かも知れない。パキスタンのビザが下り、イ



ラクダの商隊の女たち

ンド大使館に行く。インドのビザが下り次第カブールを出ることにしよう。

10月19日。アフガンを出国することにした。知り合いになったヒッピー達には、今日出発する旨昨日のうちに話しておいた。ヒッピー達はカブールにいつまでいるか分からないと言っていた。今日はアジアハイウェイ中一番の難所であるカイバル峠を越さなければならない。今まで沢山の悪い噂を聞いてきた。オイハギに遇って身ぐるみ剥がされたとか、最近旅行者が殺されたばかりだとか、カイバルで行方不明になった旅行者は数知れずとか、そんな話ばかりなのだ。それも頷ける話なのだ。なぜならはアフガンでは小中学生位の子供まで鉄砲を持って歩いている姿を見かけることは普通で、人が撃たれることは日常茶飯事であるという。それで我々のたてた作戦は、カイバル峠は明るいうちに越す。人に止められても絶対車を止めない。というものだった。カブールからカイバル峠まで約250キロなので、朝出れば十分明るいうちにカイバルは越せると判断した。パキスタンへの道はこれまでと違って渓谷沿いに行くようになる。日本では見られないようなスケールの大きい断崖絶壁の中を行くが、路面状況はまあまあといったところで砂利道もある。雨が少ないから良いようなものの、日本みたいに雨が降ったらすぐ交通止めだろう。ちょっとした岩壁が見えると、ルートはあそこだとか衝突の何倍あるとか、そんな話になるのはクライマーの悲しい性であろうか。緑多きジャララバードを過ぎ、やがて(といっても80キロ位はある)トクハンに着いた。まだ昼時分で時間的には充分余裕があった。我々も国境通過にはだいぶ慣れてきた。パスポートとカルネを持ってイミグレーションオフィスとカスタムオフィスに行き、ボンボンと手続きを済ませアフガンとお別れ……の筈だったが。国境の辺りにはどこから来たのか、どこへ行くのか暇そうな連中がゴロゴロしていた。もしかすると国境を通過する荷物を、トラックからトラックに積み替える人夫かも知れない。書類を提出しても係官はそれに目を通そうともしない。ゴロゴロ連中と話をしたり、はたしてヤル気はあるのだろうか。これが中東だと分かっているにも随分とイライラした。二時間で通過。次はすぐ先のパキスタンのイミグレーションオフィスとカスタムオフィスである。これはアフガン側よりひどかった。係官らしき者が、それはセイコーかと聞いてきた(これらの国々ではシチズンはだめである。絶対セイコーなのだ)。二度目なので魂胆は分かっている。プレゼントすれば手続きは直ぐに終わるのである。冗談じゃない、一つしかないのに。「ごめんね。オンリーワンなんだよ」と日本語で断る。一応トランクを開けて荷物検査らしきことをするが形式的なものである。彼らが興味を示す物はカメラとかラジオとかボル

ノ雑誌とかで、自分のほしい物だけなのだ。荷物を持っていかれてしまわないよう注意していた。この通過に三時間、結局ア・パ国境通過に五時間もかかってしまったのだ。夕方になってしまった。これではカイバル峠は暗くなってしまう恐れが出てきた。どうしようか相談するが、こんな何もない所で一晩過ごすよりも、暗くなったカイバルを越した方がリスクは少ないという結論に達した。よし、では少しルビーに交換してすぐ出発することにしよう。まだテープレコーダーがどうのカメラがどうのと言っている係官に

『サンキュー・グッバイ・シーユー』

と言って外に出て行く我々の背中から、例の係官が

『〇〇〇〇・レフトサイドOK?』

と怒鳴っている。あの野郎まだ何か言ってるよと

『サンキュー・シーユー』

と返事し手を振った。遮断機を上げてもらいパキスタンに入る。アクセルを踏み込み加速している時だった。前方からえらいスピードでトラックが来た。ウワー衝突する、瞬間私は右の路肩にハンドルを切って難を逃れた。トラックはブウォーヘンというクラクションを鳴らして通り過ぎていった。

私……『今のトラック完全に左側来たよなあ』。

嶋村……『たしかパキスタンは左側通行じゃなかったかな』。

私……『そう言えば係官の奴、帰り際にレフトサイド何とかって言ってたな』。

中野……『たんちゃん戻って確かめた方がいいよ』。

再び国境に戻ることになった。遮断機のおじさんに聞くと左側通行だとの事だった。また遮断機の所には、パキスタンは左側通行である旨の看板もあったのだ。そうか、ここが右側通行と左側通行の境目だったのか。気を取り直し、再び夜のカイバル峠に向い出発したのだった。

(後編に続く)

はたしてこのアジアハイウェイ最大の難所、カイバル峠を無事越えることができるだろうか。パキスタン～インド～ネパール中、我々の貧乏旅行に最大の危機現る。最大の危機とは何か。これをいかに乗り切るか。イランのアラムクーに登れなかった我々の車に満載された登山用具が使われる時がくるのだろうか。中野の冷静さ、嶋村幸男の堅実さ、本図一統の強引さで、ヒマラヤに辿り着けるだろうか、後編をお楽しみに。

(本図一統 記)

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

- ◎Rohman No156. 1998. 4 B5 28P 浦和浪漫山岳会
越後・守門岳、上越・槍倉山、南会津・三倉山、奥利根・刃物ヶ崎山ほか
- ◎Rohman No157. 1998. 5 B5 54P 浦和浪漫山岳会
雪上訓練・遭難対策訓練・谷川岳、越後・荒沢岳、尾瀬・アヤマ平、特集春合宿・4パーティに別れて
未丈ヶ岳へ集中ほか
- ◎Rohman No158. 1998. 6 B5 32P 浦和浪漫山岳会
会越・赤崩、西上州・妙義山ロックガーデン、越後・黒又川大倉又沢、奥秩父・大皿川行福沢、南会津・駒止
湿原山菜山行ほか
- ◎わらじ No505 1998. 4 B5 24P わらじの仲間
冬の集中特集・5パーティに別れての谷川岳集中、元会員の事故報告ほか
- ◎わらじ No506 1998. 5 B5 16P わらじの仲間
越後・飯土山ほか
- ◎わらじ No507 1998. 6 B5 18P わらじの仲間
北ア・坊主尾根～三の窓尾根～剣岳・飯豊山、八王子8峰縦走ほか
- ◎逍遙 No83 1998. 4 B5 18P 逍遙溪稜会
谷川・布引山、奥日光・日光白根山、上州武尊山、安達太良山、丹沢・中川川鬼石沢、勘七ノ沢ほか
- ◎逍遙 No84 1998. 5 B5 20P 逍遙溪稜会
春のミニ集中・平標山へ2パーティで、南会津・会津朝日岳～三岩岳ほか
- ◎逍遙 No85 1998. 6 B5 16P 逍遙溪稜会
奈良・池脚川、栗平川、丹沢・玄倉川弥七沢ほか
- ◎Next! No.28 1998. 4 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん
湯河原・幕岩、近況報告ほか
- ◎Next! No.29 1998. 5 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告ほか
- ◎Next! No.30 1998. 6 B5 48P 山岳溪流釣り集団むげん
奥秩父・笛吹川東沢釜の沢、大洞川松葉沢、井戸沢、川胡蝶沢、和名倉沢、市ノ沢、惣小屋沢左俣、
荒川滝沢ほか
- ◎とまのかぜ No.65 1998. 4 B5 P 童人とまの風
安達太良・烏川テレマーク、蔵王・刈田岳山スキー、上越・タカマガギ山、赤岳天狗尾根、巻磯山
山スキー、上越・柄沢～巻磯山、巻磯ノミオ沢、井戸尾根スキーほか
- ◎とまのかぜ No.66 1998. 5 B5 P 童人とまの風
雪上訓練マチガ沢、奥多摩・矢川軍刀利沢、熊倉沢右俣、北ア・薬師岳、真昼・桑原岳、月山、
谷川岳ほか
- ◎とまのかぜ No.67 1998. 6 B5 P 童人とまの風
飯豊・杵差岳～北役岳、虎毛・役内川ツブレ沢、二口・新川北沢、奥秩父・和名倉沢ほか
- ◎山紫水明 No. 1998. 4 B5 4P 山旅の会
岩トレ・十二ヶ岳、雪上訓練・マチガ沢ほか
- ◎山紫水明 No. 1998. 5 B5 8P 山旅の会
岩トレ・三ツ峠、真昼岳ほか
- ◎山紫水明 No. 1998. 6 B5 16P 山旅の会
岩トレ・十二ヶ岳、早池峰山、岩トレ・広沢寺、谷川岳一ノ倉沢南稜ほか
- ◎すずらん通信 No.205 1998. 4 B5 12P 鈴蘭山の会
帝釈・水引～田代山、白毛門、上州武尊山、会越・御神楽岳、頸城・火打山～澄川～容稚山～
大毛無山、巻磯・ノミオ沢ほか

◎すずらん通信 No. 206 1998. 5 B5 16P 鈴蘭山の会

苗場山、頸城・小谷温泉～天狗原山～真川源流～昼間山～焼山温泉、北ア・笠ヶ岳ほか

◎すずらん通信 No. 207 1998. 6 B5 12P 鈴蘭山の会

リーダーテキストほか

◎溪游NO. 100 1998. 4 B5 10P 溯行同人溪游会 四国・石鎚山脈東赤石山銅山川瀬場谷、南紀・

相野川谷相野谷、台高・中奥川句龍谷、比良・安曇川奥の深谷、六甲・赤子谷、奥秩父・金峰山、瑞階山ほか

◎溪游NO. 101 1998. 6 B5 8P 溯行同人溪游会

六甲・住吉川西山谷、鈴鹿・朝掛頸川流れ谷、越前・部子山、北摂・大峰山西ノ谷、大峰・十津川葛谷、

奥美濃・釈迦嶺、鈴・宇賀溪ホタカ谷ほか

◎APRESSNO. 9 植村冒険館

直己の北極訓練ほか

◎APRESSNO. 10 植村冒険館

北極冒険の食糧ほか

◎APRESSNO. 11 植村冒険館

「冒険する心伝えたい」講演と冒険シンポジウム開催ほか

会報

◎溪游100号突破特集号 1998. 5 B5 160P 溯行同人溪游会

六甲・北摂の谷・11本、山陰・播州の谷・10本、若狭・丹波高原・琵琶湖周辺の谷・18本、比良の谷・17本、台高の谷・47本、大峰の谷・29本、鈴鹿の谷・18本、金剛・和泉・高野の谷・15本、南紀の谷・10本、遠征の谷40本など記録多数

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

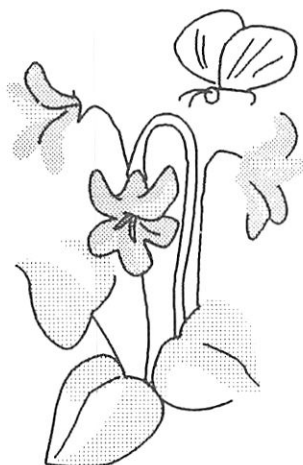
拘わりをもって事にあたる事が、人は必要であると最近思っている。常に拘わって事を進めていくと、どんなつまらないことでも新しい発見が見えてくると思う。この文集でも、ただ単に流されて原稿を書くんじゃなくて、自分の文章を日本全国の読者が読んでくれていると思って書いていけば、まるで親しい人に手紙で報告しているように書けるんじゃないでしょうか？

今回、読者の尊い意見を参考にさせていただき、レイアウトを少し変えました。知らない間にあなたの原稿は、いろいろな人の目にとまっているかも知れません。又、もしかしたら君の報告を楽しみにしている人がいるかも知れません。今書いているあなたの原稿も何処かで読者が読んでくれると思います。

これはあくまで自分自身の拘わりで、私は、俺はこんな所に行ったぞとか、こんなところが面白いぞと報告する山行もまた面白いかなと思いますが、どうでしょうか？

はたから見ても拘わりを持っている人は何か生き生きしているし、人に影響力というか刺激力があると思う。今まで人に影響されてきた人は、こんな形で人に影響を与えてはいかがかな……………。

(編集長)



季報 [R&V] 第29号 発行1998年 春 発行者：鯉河仁志
発行所：ACC-J 茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318
生井一男方
編集者：生井一男
印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団